

No. 111 2006.5.26

知恵の樹

町田の図書館活動を

すすめる会

事務局:町田市森野 3-1-12

FAX 042-722-1243 増山

かえで文庫・子どもの読書活動優秀実践団体文部科学大臣表彰を受賞!

子どもと本の架け橋にと願って

かえで文庫世話人

伊藤 倭子

昭和50年前後、成瀬の地域はおだや

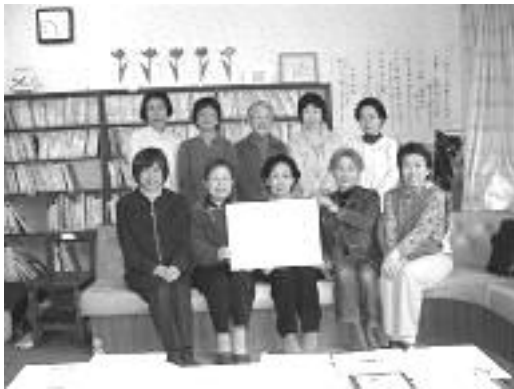
かな恩田川の流れを囲む緑豊かな田園風景から、住宅地へと大きな変貌をとげた頃でした。当時、100周年の歴史を持つ南第2小学校は、児童数増加に伴い、現在の所に新築移転されることになり、その小学校跡地をどのように活用するか、PTAで話し合いました。「是非、図書館に!」と言う声がありました。が、図書館は旧5カ村に1つずつ、南地区は金森図書館があると、図書館の夢は叶わず地域住民のふれあいの場として「地域センター」の構想が出来、そのセンター開設準備委員会が発足しました。

当時、学級委員でご一緒したSさんが中心となり積極的に準備委員会に働きかけ、子どもたちの学びの場だった跡地に是非、1室を子どもの文庫として設けて欲しい、とお願ひしました。幸いにも、私たちの願ひは理解され市の協力も得て1年の準備期間の間に文庫開設の夢をふくらませていきました。市立図書館や地域対策課(現市民課)の方に相談にのっていただき、文庫とは何か?から学びました。市内のいくつかの文庫を見学に行ったり、『子どもの図書館』(石井桃子著)を読みながら、開設の準備を進めていきました。書架も揃い、本は図書館から長期団体貸し出しとして2000冊余運んでいただき、地域の方の寄贈もありで2300冊ほどそろいました。1冊ずつきれいにほこりをぬぐいながら書架に並べていく作業が楽しく、自分たちがたくさん本に囲まれていることで嬉しくなったものです。

センター開所が昭和54年9月。文庫も26日(水)に開室を迎えました。当日は雨でしたが、80余名の登録があり、それからは毎週水曜日、1時30分からは子どもたちの列ができました。理科準備室として使われていた部屋(普通教室の半分)が文庫室となり、隣は教室1つ分の広い多目的フロアでした。水曜日毎に子どもの利用数が100~150名と増えつづけ、世話人も協力者が次々と加わり、嬉々とした日々でした。

はじめは、貸し出し作業とあとの整理で追われましたが、少し落ち着いてくると隣のフロアで絵本読みやおはなしをしました。まだ、ファミコンやゲームもない頃で子どもたちは毎週楽しみに来て、うれしそうに本を抱えて帰りました。地域の子どもの近くに本のあるところがあり、顔見知りのおばさんがいて本を手渡してくれる。そんな場所として公共の図書館とは違った気安さもあったのでしょうか。最も、子どもにとって公立図書館は遠い所でしたが…

開所1周年祭に文庫の運営費捻出のため、地域に呼びかけ不用品を出して頂きバザーをしました。その時の収益を元に、毎年秋のセンター祭りには文庫の披露をかね喫茶室として、手作りケーキとコーヒーを出し、わずかながらもその収益金を運営に当て、文庫の蔵書も少しずつ増やしています。お祭りの時、はじめて文庫の存在を知り、世話人として入って下さる人もいます。また、喫茶室の時だけ協力して下さる人もいて地域ぐるみで文庫を支援してく



ださるのを感じられます。センター祭りでのかえで文庫の喫茶室は定着し、良き休憩所となっています。

開所から3年間ほどは文庫に毎週来てくれる子どもは多く、記録によると最高で1日240名の利用が見られます。狭い部屋の本棚に子どもたちが群がり、争うように本を手にした状況を思い出します。

昭和62年6月から、センターにホールの増設工事が始まり、工事中は半年の間休館となります。文庫はどうしよう！半年間も本を眠らせておく？本を求める子どもたちは？何か続けられる方法はあるはず。そこで、地域対策の方たちに相談して、歩いて10分ほどの小学校の空き教室を借りることになりました。受け入れ側の小学校も歓迎してくださり、校長先生自ら「かえで文庫」の看板まで用意してくれました。引越しは市の図書館と地域対策課で分担して、書架と3000冊余りの本をはこんでいただきました。その学校では、センターとはまた違った子どもたちと出会い放課後のひと時を楽しみました。

また、ホールの工事終了後には文庫は隣の広い(1教室分)ところに移設の要望を出しました。学校での仮住まいは12月までで63年の1月にセンターに戻りました。昔の1教室分のフロアを文庫として活用することができ、土曜日も開室するようにして現在に至っています。

センターホール落成記念に、当時南2小の井上武司校長先生の講演「本を読む子に育てるには」がありました。「成瀬の子、かえで文庫で本好きに」と色紙も書いてくださり、今も文庫に飾ってあります。

文庫の引越しはもう1度ありました。平成9年12月から4月までセンターは館内の内装改修工事のため休館。4ヶ月の間どうするか？やはり閉めておくことが出来ず、センターのシーズンオフ中のプール

更衣室に半分の書架と本をリヤカーで運び、移動しました。あおぞら学童さんのすぐ傍だったので、1、2月の寒さも乗り切り楽しく過ごしました。

近くに本のある場所があれば、こどもは本を手に取り物語りに遊ぶことができるはず。子どもと本の架け橋になりたいものと思いつつながら、たいした架け橋にはなれないまま、月日だけが過ぎてしまったような気がしています。

私が子どもだった頃は東京の空襲から逃れ、辿り着いた片田舎には本屋さんよりもより学校は歩いて2里のところ。放課後は子守っこをしながら読むものを探していたような時代でした。

縁あって文庫に関わったのは、長年憧れていたものに近づけた気分。本に囲まれているだけでも幸せでした。自分の子育ての時とはまた違った様々な本に出会い、それを子どもたちと1冊ずつ読み、楽しんでいきたいという思いで文庫に携わってきました。気が付いてみれば27年目、最初からずっと続けていられたことに感謝したい思いです。途中で転居やお仕事で、やむなく文庫の世話人をおりられた方には申し訳ないようです。文庫の仲間たちは力まらずいつもさりげなく、携わっています。決して本が好き！と言う人ばかりではありません。でも、文庫が好きなたちです。今度の文部科学大臣表彰の〈こどもの読書活動優秀実践団体〉には少し戸惑いを持っています。地域全体にはとてもありがたいことだと思っています。

地域の子どもたちも、毎回くる人、1回2回で来られなくなる人と様々です。短い子ども時代を近くの文庫でたくさんの本に出会い、地域の人たちに出会えたことがいつかその人の1つの光になってくれるかもしれない。本の世界は夢、力、友を与えてくれます。文庫を利用して嬉しそうにたくさんの本をかかえていた人たちの姿が思い出されます。

時代が変わり、子どもたちを取り巻く状況もずいぶん変わって来ました。文庫に来る子どもも少なくなってきました。本はたくさんあって誘いかけているのに、手に取られずほこりを被っていたりします。子どもたちに手渡したいのに思うようにはいかない。文庫は本を読むだけ、借りるだけではなく子どもたちは様々な物を求めてくるようです。いつも、一人

で黙って過ごしていく子がやっとな、ぽつりぽつり話
すようになったり、いつも虫やらとかげやらを大事
そうに持ってきて、本は虫関係ばかりと言う子が「毎
日文庫を開いて！おねがい！」と叫ぶ。

そんな文庫をやはりいつまでも大事に思って、地
域のおばさんたちは本に囲まれながら、子どもたち
の来るのを待っています。

(いとう しずこ 会員)

「ヒロシマ ナガサキ 私たちは忘れない」

片岡貞子

記事 不明

炭やき

最も原初的な炭焼き法の実践

野外での実践と図書館での上映会を結んで、「人と自然」を感じ・考えたいと4月5月の2回にわたって、連続講座を開催しました。

4月は、雑木林と草場が連なるのびやかな自然のなかで、「伏せやき」「穴やき」という最も原初的な炭やき法を体験し、5月は、自然と深く結びついた人たちの暮らしを撮りつづけている(現在、製作数は120作品)民族文化映像研究所の記録映画「たまはがね 子どもがひらいた古代製鉄の道」を見て、監督を囲んで座談会を一というもの。

市民団体が自主的に取り組んだ企画ですが、“いま、地域にどんな場が必要であるか”を考えることにつながる、広がりを持つ内容になったと思います。

今号で「炭やき」を、そして次号で「映画上映と座談会」の様子をレポートさせていただきます。(久保礼子)

● 4月29日(土) 30日(日)

10時 ~ 14時頃

講師: 鶴見武道氏

愛媛大学助教授

「えひめ千年の森をつくる会」会長

著書に『エコロジー炭やき指南』(創森社)

『来るべき林業の時代に』(富民協会)など。

会場: 野津田公園ヤマナラシ広場

当日、会場のヤマナラシ広場は一面タンポポの花の黄色に埋まり、周囲は新緑の勢いある緑。訪れた参加者から、次々、その美しさに歓声があがりました。こんな気持ちのいい場所で、一昼夜かけての原初的な炭やきが体験できるなんて…。公園担当者の理解と協力があってこそです。使用する炭材は、公園の雑木林の手入れのために今年1月、2月に緑化企業組合の方々が伐ったものを提供していただきました。



伏せやき

風の向きを確認して位置を決め、伏せやきは、まず穴掘りから始めます。私たちは今回、その段階で実験を行ないました。床を上り勾配のものと下り勾配のものと作り、炭化の比較をしてみたいと思ったのです。炭やきの歴史は縄文時代からといわれていますが、その技術の歴史を“火の流れ”から探してみたいと思いました。「床の傾斜によって火の流れが違ってもかもしれない。縄文時代の炉に、すでにその工夫がうかがえる。」と視点をなげかけてくださったのは、民映研の姫田所長でした。

掘った穴に炭材を並べ、煙突を設置。落ち葉で全体を覆い、トタン板をかぶせて、その上に土を。そして、点火。炭材が自分の力で燃え始める着火まで、ひたすらあおぎ続けます。その後は、煙の色の変化を見ながら温度の上昇を確認して空気口を調節するのですが、これは厳しい職人的な仕事と納得です。上り勾配と下り勾配に、はっきり違いが現れました。

時間をかけての素朴な工程を楽しみながら、実験の結果にドキドキ。不思議な体験です。

穴やき

そんな伏せやきの隣で、穴やきは子どもたちの独壇場となりました。直径、深さとも1メートルあまりの丸い穴を掘るという作業に、子どもたちの目が輝きました。「自分たちだけでやるから、大人はダメ!」と宣言して、もくもくと穴を掘り続けます。仕上がったら、穴に枝を投げ込み火をつけて、おき火をつくり、その上に太い丸太をほうりこみます。枝を集めるのも、炭材にする太い丸太を運ぶのも意気揚々。子どもたちに、こんな力と集中力があつたのかと…驚きです。

「ねえ、本当に炭ができるの?」「できた炭は、ぜ〜んぶ私たちのもの?」と弾んだ声が聞こえてきました。

着火して燃え上がる火を見て、上にトタン板をかぶせ、その上に土を。講師の鶴見さんの作業も、こちらでは伏せやきと対照的にダイナミックです。



翌日、10時過ぎに炭出し。宝ものは炭だけではなくて、昨日からの時間なのでしょう。みんなの顔は、炭を見る前から輝いてうれしそうでした。

実験の結果は、“人と自然の歴史”に気づく小さな小さな一歩——と。「こんな気づき方がいいな」と実感できたことが幸せでした。(今回は、上り勾配の方に未炭化の炭が多く出ました。火の流れが早すぎるのかもしれませんが。)

児童書のコーナーで、偶然、こんな本を見つけました。
農文協の<つくってあそぼう>のシリーズ。

『火と炭の絵本』 ⑩火おこし編 ⑪炭焼き編
すぎうらぎんじ編・たけうちつーが絵
'06年・3月発行です。

“炭ってなに” “炭の発見と文化” など、技術とは違う側面の、炭の深いおはなしも簡潔な文章で、丁寧にとりあげられていて、絵が元気で楽しいのです。

「こんな本と一緒にまた子どもたちと炭やきを」と、今回の私たちの企画意図にぴったりの本にあって、嬉しくなりました。



当日の参加者は、家族連れが多く、約60名。子どもは、幼児～中学生まで。また、有機農業や川の問題に取り組んでいる方の姿もあり、環境問題において炭の利用の関心が高まってきていることが伺えました。



ひろば

3月例会報告>23日(木)13:00~16:30
於・中央図書館中集会室

出席/伊藤 川野 久保 島尻
前島 中山 増山 丸岡 桃澤

- 会報について・(原稿をどしどしお寄せください)
- 和歌山静子さん講演会の打ち合わせ
 - ・スタッフは、12時集合/会場設営準備
 - ・役割分担を決める。
- 国松俊英氏100冊出版記念会について
すすめる会でこじんまりとお祝いをしましょう、ということて話し合う。幹事は守谷さんと伊藤倭子さん(巻頭言参照)。
- 2006年度の活動について
 - ・世話人は前年度と変わらず
 - ・半年間の例会日程(予定)が決まりました
場所:中央図書館中集会室
4/20(木)、5/26(金)、6月お休み
7/20(木)、8月お休み、9/21(木)
- 「かえで文庫」が子どもの読書活動優秀実践団体文部科学大臣表彰を受賞しました。4月23日(日)「子ども読書推進フォーラム」で授賞式が行われます。

野津田雑木林との共催イベント

「人と自然」連続講座

人は自然から何を学びどのように自分たちの暮らしを創り出していったのか
基層文化の一端を实践と理論で考える

I. 原初の炭焼き法 穴やき・伏せ焼きの实践 & お話「炭やきの現代的意義」

4月29日(祝)、30日(日)10時~翌日14時迄
会場:野津田公園ヤマナラシ広場

講師:鶴見武道氏(愛媛大学助教授・えひめ千年の森を作る会会長) / ゲスト:姫田忠義氏

参加費:大人1000円,小学生500円,幼児200円

II. 記録映画上映「たまはがね—子どもがひらいた古代製鉄の道」(民族文化映像研究所制作) & お話「鉄は宇宙からの贈り物 そして火もまた」/ 5月14日(日)10:30~
中央図書館6Fホール

講師:姫田忠義さん(民族映像文化研究所長)
(問合せ: ☎&FAX 045-961-5045 久保)

I. ワークショップ

5月17日(土) 15:00~19:00

野津田公園上の原広場

講師:北山耕平氏

一般参加費1500円

学生500円(小学生以下無料)

おはなしボランティア5回セミナー

風をひらく

世界を深く理解するための伝統的耳の訓練法

II. 講演会

「原語から訳されたおはなしの面白さ」

講師:乾 侑美子氏

5月27日(土) 10:00~12:00

町田市民フォーラム学習室/参加費500円

問合せ:まちだ語り手の会事務局

TEL&FAX 042-795-3016 市川

makatari@at-duplex.bias.ne.jp

★親地連第19期総会記念講演会

トーク・トーク「旅で出あったこともたち」絵本作家浜田桂子さん&小林豊さん/5月27日(土)14:00~16:00(受付13:30~)主催:親子読書地域文庫全国連絡会・無料/問合せ:045-303-5096 村島

★学校図書館を考える全国連絡会 第10回集会

「ひろこう! 学校図書館」/6月11日(日)/10:40~記念講演「教育基本法と学校図書館」講師:山口源次郎さん(東京学芸大学教授)/13:30~「政府の図書館施策を考える」講師:松岡要さん(日本図書館協会事務局長)/13:50~実践報告「東京・東大和市の現状」(東大和文庫連絡会 小穴とみさん)、「荒川区の現状」(小学校教諭 山本さゆりさん)/14:40~意見交流・情報交換/主催:学校図書館を考える全国連絡会/問合せ:03-3816-5271 篠澤

★民族文化映像研究所創立30周年記念シンポジウム

「世紀を超える歷程—基層文化記録の旅—」/7月2日(日)東京大学弥生講堂・一条ホール 12:00 会場 13:00 閉会/13:10~上映「フロンティアからの出発(仮題)」14:20~佐藤忠男・川田順三・浜美枝・姫田忠義各氏によるシンポジウム(問い:徐士・日/044-986-6461 民族映像文化研究所事務局)

あとがき

図書館の職員研修に呼ばれて、市民との協働とか、図書館に望むこと等を話す機会を得た。その資料として提出しようと、前々から気になっていた町田の図書館運動の歩みをまとめてみた。まだ中途だが市民の運動が図書館の動きをリードしている事を改めて確認した。休館日の図書館のホールに、こんなに職員がいたのかと驚くほど大勢の人が集まり、熱心に耳を傾けてくださったが…。(M')